

特別活動の指導法における「三つの視点」と学級活動 —係活動の再構築による資質・能力の育成—

“Three Viewpoints” and Class Activities in the Teaching
Method of Special Activities
— Development of Qualities and Abilities by Restructuring Staff Activities —

佐藤 洋一、西尾 一
Yoichi SATO, Hajime NISHIO

要旨

2020年4月から実施される新学習指導要領における小学校・教育課程では特別活動は国語科学習とともに教育課程の「要」とされている（「総則」他）。特別活動の基盤をなす学級活動は「話し合い活動（学級会）、係活動、集会活動」の3つの活動で構成されているが、係活動は児童の自己有用感や効力感を高め学級の構成員としての成長や協働的な学び・活動の一体感を感じることのできる有意義な活動である。しかし、実際には係活動と当番活動の区別が不明確、高学年でも低学年のような活動がなされている等、実践的には依然として課題が多い。

本稿は「係活動」を特別活動における「三つの視点」と資質・能力育成の観点から改めて検討・吟味を行い、新学習指導要領が求める創造的・自主的で知的な活動に高める係活動の在り方を検討、提案を行うものである。

Keyword

学級係活動、特別活動「三つの視点」、人間関係形成・社会参画・自己実現

1 学校教育の基盤としての特別活動

学校教育の究極的なねらいは生涯にわたり学び続けること（生き方の探究）、各教科における確かで質の高い学びや協働的・親和的な体験活動、「主体的・対話的で深い学び」の実現・「カリキュラム・マネジメント」などによる資質・能力の育成を通しての全人教育・人間形成である。

その中でも、いわゆる人間形成を直接の目的とする特別活動はまさに学校教育の基盤である。特別活動では、集団活動や体験活動を通して他者と関わ

り、学校や学級生活をより豊かにし、人間関係を形成する力や社会に参画する力の育成を目指すとしてされている。

学校教育において特別活動を活性化させることは、学校（地域も含め）や学級の中に感動的な場面を生み出し、それは学校や学級をはつつとしたものに変容させる。また、特別活動の中で児童一人一人のよさや可能性が発揮されると、児童にとって学級や学校は安心感をもって生活・学習をすることのできる寛容で親和的な雰囲気をもった場所となる。学校（地域も含め）や学級生活及び学習の基盤づくりに重要な役割を果たすのがまさに特別活動である^(注1)。新学習指導要領においてあらためて、教育課程における特別活動の位置が重視されたことの意義は大きいと考えることができる。

2 特別活動「三つの視点」からの吟味

(1) 特別活動における「三つの視点」

平成29年版小学校学習指導要領では、特別活動で資質や能力を育成するための視点として「人間関係形成・社会参画・自己実現」の三つが示され、それらは次のように定義されている。

- | |
|--|
| ①人間関係形成…集団の中で、人間関係を自主的、実践的によりよいものへと形成するという視点 |
| ②社会参画…よりよい学級・学校生活づくりなど、集団や社会に参画し様々な問題を主体的に解決しようとする視点 |
| ③自己実現…集団の中で、現在及び将来の自己の生活の課題を発見し、よりよく改善しようとする視点
(平成29年版 小学校学習指導要領解説特別活動編 P.12より) |

この三つの視点は「特別活動において育成を目指す資質・能力における重要な要素であり、これらの資質・能力を育成する学習過程においても重要な意味をもつ」としている。つまり、三つの視点は、特別活動の目指す資質・能力でもあり学習過程でもあるということである。この三つの視点を常に意識し、学級や学校で実施される特別活動の様々な集団活動・体験活動を検討したり吟味したりすることが求められている^(注2)。

(2) 学級活動の意義と問題点——中核としての機能の再検討を——

特別活動の中核は「学級活動」であるといわれている。学級活動での活動経験が学校全体での活動や児童会活動に向けての自信となるばかりでなく、学級での係活動や当番活動の経験は児童にとっては存在感や自己有用感・効力感を直接的に感じられるよい機会である。実際に、学級で係活動や当番活

動に生き生きと取り組んでいる児童は、自分自身に自信をもち交友関係も良好であることが多い。なぜなら、学級の一員として自分が必要とされている実感や仲間と協力して活動する充実感や楽しさを感じることができるからである。係活動や当番活動は「学級生活の充実や向上のために役割を自覚しながら仕事を分担するための学級内の組織」であるが、当番活動が「学級の維持や管理に欠くことのできない仕事（掃除や給食、日直等）を分担・処理する活動」に対して、係活動は学級生活を楽しく豊かにすることを目的としており、学級活動の中でも特に児童が創造性を発揮することができるものが係活動である^(注3)。

しかし、特別活動には教科書やそれに付随した指導書があるわけでもなく、その指導のあり方は校務分掌の特別活動担当者や児童会（生徒会）担当者、各担任に任されている。そのため、指導者の経験や考え方、各校におけるこれまでの取組等に強い影響を受けることになり実践は非常に多彩になる反面、その活動や取組みの質や評価の在り方は十分に検討・吟味されることなく単純に継続されることも多くなる。担任に任されている学級活動ではなおさらであり、反省や改善、教育課程全体での位置の検討などが十分に行われているとは言い難いのがこれまでの特別活動の実態と言っても過言ではないだろう。特に、係活動はその活動内容が十分に吟味されることなく、同じような活動が低学年から継続的に行われ、高学年になっても創造性や発展性に乏しいものとなってしまっているのが現状である。

新学習指導要領では各教科と同様に特別活動においても育成すべき資質・能力が明確に示され、表層的なスキルや安易な体験重視からコンピテンシー・ベース型教育への転換が求められている。各教科・領域で「習得・活用（探究）」された学びを実践化するのは特別活動であり、とりわけ活動の機会が多い学級活動では非認知スキル（社会情動的スキル）を含めた、いわゆる汎用的な能力の向上が期待できる^(注4・10)。

(3) 学級係活動の実態

本来、係活動は児童が創意工夫して自主的、実践的に取り組む活動であり、創造性や発展性に満ちた活動内容となる。しかし、2(2)で述べたように現実には組織される係もその活動内容も低学年から高学年までほぼ変わることはなく、創造性も発展性がなく問題が多い。

次に愛知県大府市立の小学校2校の係活動を示し（表1・2、2018年調べ）、その問題点をさらに明確にする。

表1・2とも学年ごとの係活動表である（係活動は各学校や学級によって異

なるため現実には非常に多様であり、ここで取り上げたA・B両小学校の例だけで「小学校の係活動の実態」とするのは問題がある。あくまでも一つの事例として提示・検討していくことにする。

表1・2から係活動がどのように行われているのか、その様子や状況を具体的に読み取っていく。

(表1) A 小学校の係活動 ※参考資料として中学校の係活動もあわせて提示した。

A 小学校						【参考】 中学校 (2年生)
1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	
しよき ほけん きゆうしよく でんき こくばん はいたつ おんがく たいいく せいれつ おてつだい チェック	書記 ほけん でんき・まど こくばん はいたつ 音楽 体育 せいれつ お手伝い チェック せいとん でんしこくばん <u>おたのしみ</u>	書記 ほけん 給食 電気・まど 黒板 配達 音楽／書写 せいれつ せいとん	記健食 書保給 配達 配音楽 体育 整理 整とん 掲示	黒板 体育 お手伝い 掲示 <u>お楽しみ</u> <u>イラスト</u> <u>バースデー</u>	書記健 書保健 電気・窓 黒板 配達 時間割 体育 掲示 <u>お楽しみ</u>	書記(日誌) 書記(背面黒板) 配膳 配膳(配付) 集配(ロッカー) 集配 掲示 教科連絡係 語学 社会科学 理科 音楽 美術 体育(男子) 体育(女子) 技術・家庭

(表2) B 小学校の係活動

B 小学校					
1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
ほけん きゆうしよく でんき・まど こくばん おんがく たいいく せいれつ おてつだい チェック すいとう がくしゅう	ほけん きゆうしよく でん気・まど こくばん 音がく 体育・せいれつ お手伝い 水とう・名ふだ しゅくだい	ほけん 給食 電気・まど 黒板 音楽 体育 学習 けいじ	保給健食 音楽 体育 教科連絡係	保給健食 黒板 音楽 体育 お手伝い 宿題 配達 生き物 新聞 環境 <u>ダンス</u> <u>図工</u> <u>スポーツ</u> <u>4コマ</u> <u>あいさつ</u> <u>お笑い</u> <u>お楽しみ</u>	保給健食 黒板 音楽 スポーツ お手伝い 環境

表を学年に沿って横に見ていくと、それぞれの学年で共通した係があることが分かる。小学校1年生から6年生までを比較しながら見ても、少なくとも係名を見る限りでは大差はない。つまり、1年生でも6年生でも係活動の実態はほぼ変わらないということである。係名だけでなく活動内容も学年によってほとんど変わりはなく、「ほけん（保健）係」は朝の健康観察を保健室に提出したり出欠席黒板に出欠状況を記入に行ったりする。「おんがく（音楽）係」は音楽専科教員との教科連絡を行う。「きゅうしょく（給食）係」は給食前後の机拭き等である。給食係が存在しない学級では、机拭き等は日直が行っている。「たいいく（体育）係」は体育授業の準備運動を行うなどである。「体育係」が「スポーツ係」と名称が変わろうが、活動内容は変わらない(参考として示した中学校の係活動も、ほぼ同様である)。学年や校種が変わっても係活動の内容はほぼ変わらないという、驚くべき実態を指摘することができる。

(4) 「三つの視点」から見た係活動の問題点

先の2(1)で示した特別活動の「三つの視点」の定義を見直すと「よりよいものへと形成」「よりよい学級・学校生活づくり」「集団や社会に参画」「主体的に解決」「自己の生活の課題を発見」「よりよく改善」等の表現が使われており、積極的で実践的な姿勢が求められていることが分かる。また、この視点とは別に平成20年版の小学校学習指導要領解説特別活動編では、係活動を「楽しい学級生活づくりのための係活動」「学校生活を豊かにする係活動等」と定義している。そして、平成29年版でも「学級を楽しく豊かにするために必要な係」としている。

では、現実の係活動はどうか。表1・2の太字・下線部分の「係」を除くと、その大半が「集団生活をするために欠かすことのできない活動」「学級を維持するために必要な活動」であることがわかる。つまり、きわめて「当番的」な活動内容となっており、『よりよい・参画・主体的・改善』というような積極的で実践的な視点とはほど遠い。係活動と当番活動が混同されており、それはこの両者を区別していないことが大きな問題点であることを指摘しておく必要がある。

また、係活動が積極的で実践的なものになっていない理由は、例えば次のようである。

- ① 小学校1年生に積極的で実践的な係を組織させることは、経験の少なさから非常に難しい。そのため教師側から一人一役的な活動内容を提示し、児童の希望によって所属を決めるのが通常の方法になっている。

- ② 2年生以降は前学年での係活動の経験をもとに組織化されていくことになり、その結果、1年生から6年生まで同じような係活動が継続されることになる。
- ③ 係活動を組織する時期は学年や学期始めであり、児童が活動内容を十分に吟味したり検討したりする時間が与えられていない。

表1・2で示したような係活動は「楽しい学級生活づくり」や「学校生活を豊かにする」に効果的に寄与するとは考えにくい。まずは、特別活動の「三つの視点」との整合性を図りながら、係活動を十分に見直し再構築する必要がある。

3 小学校学習指導要領解説における係活動の定義

(1) 係活動についての混乱

小学校学習指導要領解説特別活動編の平成20年版(P.49)・平成29年版(P.71)には、それぞれ次のような記述がある。

20年版 係活動は、学級の児童が学級内の仕事を分担処理するために、自分たちで話し合って係の組織をつくり、全員でいくつかの係に分かれて自主的に行う活動であり、児童の力で学級生活を豊かにすることをねらいとしている。(下線部は西尾による、以下同じ)

29年版 係活動は、学級の児童が学級内の仕事を分担処理し、児童の力で学級生活を楽しく豊かにすることをねらいとしている。したがって、当番活動と係活動の違いに留意し、教科に関する仕事や教師の仕事の一部を担うような係にならないようにすることが大切である。

ともに「学級内の仕事を分担処理」とある。学級内に存在し「処理」をする仕事とは、「集団生活をするために欠かすことのできない活動(仕事)」「学級を維持するために必要な活動(仕事)」のことである。つまり当番活動そのものであり、「学級内の仕事を分担処理」することは「学級生活を楽しく・豊かにする」ことにはつながりにくい。これは大きな矛盾であるばかりか、29年版では続けて「当番活動と係活動の違いに留意し」とある。この「当番活動と係活動の違い」を明確にすると共に、児童にも違いを認識できるように指導すべきである。

29年版では、係活動を「学級新聞係や誕生日係、レクリエーション係など」と例示したうえで、「創意工夫しながら自主的、実践的に取り組む」と活動のあり方にまで踏み込んでいる。確かに、学級新聞係や誕生日係、レクリエーション係等は「創意工夫しながら自主的、実践的に取り組む」ものであり、

「学級内の仕事を分担処理」するようなものではない。係活動は自主的で創造的な活動である。

(2) 係活動と当番活動を区別

学級新聞係や誕生日係、レクリエーション係ならば、児童の創意工夫を十分に生かした活動になることは容易にイメージできるし、自主的に係活動に取り組めるに違いない。しかし、係活動を「学級新聞係、誕生日係、レクリエーション係…」として児童に提示する訳にはいかない。児童の創意工夫や自主性を重んじるには、係活動の定義を明確にして分かりやすく示し、児童が自ら係活動を創造できるようにすることが重要である。

文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター発行の指導資料・事例集リーフレット版には、係活動と当番活動の定義が区別されて記されている。このリーフレットは平成25年と30年に発行されており、抜粋してまとめたものが次頁の表3である。平成25年版では両活動の違いが明確ではなく分かりにくいのが、反対に30年版の定義はとても分かりやすいものとなっている^(注5・6)。

この定義を児童の発達段階に応じて分かりやすく表現を変えていけば、学級生活を共に楽しく豊かにする活動を創造することができるようになる。

(表3) 係活動と当番活動の定義 (注5・6のリーフレットをもとに西尾作成)

	平成25年版	平成30年版
係活動	児童がその仕事を見い出して創意工夫し、学級の生活をより主体的、自主的で豊かなものにしていく活動で、学級生活の向上に資するものです。	学級生活を共に楽しく豊かにするために児童が仕事を見いだし、創意工夫して自主的、実践的に取り組む活動です。
当番活動	学級の生活が、円滑に運営されていくために学級の仕事をみんなで分担し、担当しなければならぬ活動で、学級生活の充実に資するものとも言えます。	学級生活が円滑に運営されていくために、学級の仕事を全員で分担し、担当する活動です。

4 係活動組織化の工夫

(1) 発達段階を踏まえた係活動の組織編成

係活動と当番活動が明確に定義付けられ区別できるようになったが、低学年児童に係活動を創造させることは難しく段階的に係活動の内容や質を向上させていく必要がある。この発達段階に応じた組織編成を指導者側が意識をしないと、実態として示したように低学年での係活動が高学年まで単純に継

続されていくことになる。また、学級経営の視点としても係活動の質的（知的）向上を取り入れることで、学級は確実に活力が旺盛になってくる。

平成26年6月に国立教育政策研究所教育課程研究センターから出された指導資料には、発達段階を踏まえた係活動編成のポイントが下の表4のように示されている^(注7)。

(表4) 指導内容の工夫 (注7：『係活動の指導のポイントは？』P.59より)

	組織編成のポイント
1年生入門期	学級生活にとって必要な仕事を見つけて自分から進んで取り組む。(一人一役の仕事見付けの段階)
低学年	少人数で構成された係で仲よく助け合って活動する。楽しい学級生活にとって係が必要であるという意識を高める。当番的な活動から創意工夫できる係活動に移行していくようにする。
中学年	低学年までの当番的な活動を整理統合し、創意工夫が生かされる係活動を組織する。協力し合って計画的に活動に取り組めるようにする。
高学年	教師の指導に頼ることなく自主的に係活動を進めたり、自分のよさを積極的に生かせる係に所属したりして、集団的な活動の質を高めていく。

1年生入門期は、「一人一役」の当番的活動からスタートする。そこでは、活動することの楽しさや自分に任せられた責任、確実に実施できたときの達成感等を確かなものにし、自主的に取り組もうとする態度を育てていく。そして、この後の「一人一役活動」から、「創意工夫に満ちた活動」へとどう変化・向上させるかが指導のポイントとなる。表4でいえば、「低学年…当番的な活動から創意工夫できる係活動に移行していく」「中学年…低学年までの当番的な活動を整理統合し、創意工夫が生かされる係活動を組織する」

の部分がそれにあたる。具体的な係活動の組織手順を次に示す。

(2) 小学校中学年・高学年における係活動組織の段階的指導

次のような段階的指導を行う。

第1段階…前学年での係活動と当番活動を振り返る。

- ・前学年で行った係活動と当番活動を想起・発表させ、黒板に列記する。

第2段階…係活動と当番活動の違いを意識させる。

- ・これまでに行ってきた係・当番をもとに、「係とは・当番とは」を考えさせる。
(係活動と当番活動の区別がつかず、困惑することが多い。)

第3段階…係活動と当番活動を定義するとともに、係活動や当番活動を見直しさせる。

- ・係活動…「学級を楽しくする、学級を仲良くする、学級のみんなを賢くするための活動」である。
- ・当番活動…「学級としてやらなければならない活動。仕事をする中で、学級のみんなが快適に気持ちよく生活できるようにする活動」である。(だからこそ、全員で分担したり輪番で担当したりする。)

- これまでに行ってきた係活動の多くが当番活動に吸収され、日直等の当番活動の幅が大きく拡大することになる。

第4段階…係活動を創造する。

- 「学級を楽しくする、学級を仲良くする、学級のみんなを賢くする」という観点で、新たな係活動を生み出す。
(考えたり相談したりする時間を十分にとることが重要であり、一週間ほど時間をかける。)

5 係活動の創造的展開——「新聞係」による歴史新聞作成650号へ——

「学級を楽しくする、学級を仲良くする、学級のみんなを賢くする」という観点は児童にとって分かりやすく、高学年に向かうにつれてユニークな活動が創造されてくる。「楽しく・仲良く・賢く」という観点は、係活動を展開するうえでもよい活動スローガンとなる)また、活動内容が吟味されるため、下のようにこれまでと同じ名称の係であっても、活動内容は大きく変わってくる。

- 体育係**…体育授業の前に整列をさせたり準備体操をしたりする。
- ↓
- 体育係**…学級のみんなの体力を高めるため、外遊びを提案して休み時間を楽しむ。
- ・ やりたい外遊びを募集し、休み時間に「遊び大会」を開く。
 - ・ ニューススポーツを紹介して、休み時間に体験してもらう。

ここで示した「学級を楽しくする、学級を仲良くする、学級のみんなを賢くする」という係活動の定義は、まさに特別活動の「三つの視点」にある「人間関係形成、社会参画、自己実現」が具体化した状態を学級内に創り出す。

例えば、レクリエーション係、歴史体験係、スポーツ係、企画係等様々な係が考えられてくる。「学級を楽しく・仲良く・賢く」をねらいとすることで、創意工夫を生み出し自主的で実践的な係活動を展開することができるようになる。このような係活動の典型が「新聞係」である。

(表5)の作文は新聞系の活動を振り返ったものである(西尾による実践事例の一つ)。この係は年間で650号の新聞を発行した。(この作文は卒業文集用であり、この作文を書いた後も新聞を発行し続け、最終的に650号となった)この作文には、この児童が係活動によって学級集団に参画したことや自己実現できたことが記されている。

(表5) 新聞系の活動を振り返った児童作文

私の「歴史かしぎ発見!!革命」

「やったー!五〇〇号だ!」
と、私は心の底から声をはり上げました。五〇〇号というのは、学級で私たちが学習係が発行している社会科学学習新聞の発行号数です。

新聞を書くことはとても楽しかったです。私たちが学習係は一日に四〜五枚の新聞を発行していました。時代別に日本史をわかりやすく書くだけでなく、町の歴史や学級での歴史体験をとりあげていました。阿ス比町の歴史の中で最も印象に残るのは平泉寺です。鎌倉時代に源頼朝が訪れたという言い伝えがある上に、室町時代には元軍退散の祈りがされていたという話。また、江戸時代には寺子屋の役割を果たしていたというのです。学級での歴史体験の中では、火おこし体験や平家物語の暗唱、それから貝合わせの体験が心に残っています。

社会科学学習新聞「歴史かしぎ発見!!」を書いたことにより、私は大きく成長しました。それは「文章を書くことに慣れた」ということです。「文章を書く」というのも新聞はわかりやすく書かなければなりませんから、ダラダラと文を連ねるのではなく、図説やふきだし、時にはマンガを描くことがあります。そのおかげで、読む人にとってわかりやすく書くことが楽になりました。社会科学学習新聞を書いたことで、歴史を好きになり、興味の輪が何重にも広がったような気がします。

今年一年間は、六年間の中で最も充実した日々を送ることができました。



児童が係活動に夢中になるには、活動を支援する仕組みも必要であり、活動が適切に評価されなければならない。支援する仕組みについては、具体的な目標をもたせ計画を立てさせたり、教室内に係活動の予定を知らせる掲示板を設けたりする。また、複数の係が協力して活動を創造することも考えられる。例えば、学級の係活動の様子を別の係が新聞やビデオにし、新聞を他学級に掲示してもらったり学校放送で紹介したりする。学校全体に活動が周知され、学級や学年を越えて係活動のあるべき姿が広まることにもつながる。評価についても、次の表6のように示されている^(注8)。

(表6) 係活動の評価

(注8 「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」 P.35より)

		活動形態別の評価規準		
		集団活動や生活への関心・意欲・態度	集団の一員としての思考・判断・実践	集団活動や生活についての知識・理解
低学年	学級生活を楽しむするために必要な仕事を見付け、友達と仲良く助け合って活動することができるようにする。	自分がやりたいことを見付け、進んで係活動に取り組もうとしている。	みんなのためになる活動を考え、仲良く助け合って実践している。	係活動の楽しさを知り、活動の仕方について理解している。
中学年	楽しい学級生活をつくるために、創意工夫して計画的に係活動を進め、協力し合って活動することができるようにする。	自分たちが学級のためにできる活動を見付け、意欲的に取り組もうとしている。	学級生活の向上に役立つ活動を考え、協力し合って実践している。	当番活動との違いなど、係活動の役割や活動の仕方について理解している。
高学年	学級生活をより豊かにするために、創意工夫を生かして効率的に係活動を進め、信頼し合って活動することができるようにする。	自分のよさを生かす活動を見付け、自主的に取り組もうとしている。	見通しをもって活動計画を立て、信頼し支え合って実践している。	係活動の必要性や活動の仕方について理解している。

係活動についても、育成すべき「資質・能力」に従って評価基準が設けられており、これを参考に各学校や学級で適切に評価がなされることで、係活動をさらに創造的な活動に向かわせることができるようになる。

6 まとめと今後の課題

教師の指導力の幅でしか児童は学べないと言われ、教師の認識が変わらなければ児童の考えも変わらない。だからこそ、学級係活動を活性化するためには、まず教師が係活動と当番活動の違いを明確に認識することである。そして、その違いを児童に理解させることである^(注9)。

さらに、児童の発達段階に応じて係活動を創造的・知的に展開できるように段階的に指導したり、係編成時に時間的なゆとりをもたせたりして、児童の意識を創造的な係活動に向けていくようにする（新しい係を創造するために、家族で相談するという機会を設けてもよい）。

係活動の始まりの段階は、教師にとって価値が低そうに見えることも多い

が、児童にとっては模索の段階であり見守りが必要である。最初はおぼつかない歩みでも、児童は「なすことによって学ぶ」を繰り返し必ず質的に向上していく。児童の創意工夫や自主性を大切にしていけば、係活動の内容だけでなく学級や学校生活が充実・向上していくようになる。

また、係活動や児童の発想や考えを生かしやすい。児童に「自分たちの発想や考えを生かすことができる」という気持ち・思いが芽生えると、児童は係活動に非常に意欲的になる。結果的に「資質・能力」の中でも「学びに向かう力、人間性等」の「主体的に学習に取り組む態度」が確実に伸びると言うことができる。

さらに、係活動を継続することは「粘り強さ」や「創造性」「協調性」等の非認知スキル（いわゆる「社会情動的スキル」・OECD）を児童に培うことになる^(注10・11)。係活動がこのような力を伸長させる理由は、

- (1) 係活動を行い創造するのは児童自身であり、そこでは自分の夢や願いを実現することができる。
- (2) 常に「なすことによって学ぶ」という直接的な経験・体験であるため、活動の結果を自覚でき分かりやすい。
- (3) 係活動は学級（全体や公共性）への貢献活動であり、自らの活動によって学級が親和的になることを実感として感じることができる。
- (4) 係活動は（授業等に比べると）長期間の活動になり、自分たちの上達・成長を変容と成長を通じて実感しやすい、等があげられる。

係活動の成果は学級の何気ない雰囲気にも表れ、学級全体が協調的であたたかなものとなる。さらには、教職員の共通理解ができれば、学校全体で係活動を創造的に取り組んでいけるようになり係活動によって学校全体も活性化する。

しかし、係活動は複数人で行うことが多く、児童一人一人の活動の様子を把握すること、さらにそれ等を各教科学習や総合的・探究的学習、生き方や価値観の形成、感性の豊かさ等にどのようにつながったか、メタ認知化できたかなどの評価面が依然として難しい。個々の児童の、試行錯誤も含めた主体的で創造的な活動を見守り支え、評価を適切に行うことで活動を発展進化（深化）させ、人間関係形成や社会参画、自己実現がさらに図られるように指導・支援していく必要がある。

付記

本稿は西尾一による「特別活動の指導法」に関する長年の課題意識、教育

現場における様々な実践事例と自らの実践をもとに、新学習指導要領における資質・能力育成に関わる教育課程論・教育方法論の観点から（新学習指導要領「総則」、佐藤洋一の注4・9・10の所説や提案等も参照）再構成したものである。佐藤洋一はp.21～23、31～33の執筆とともに全体に関わり、西尾一はp.23～31、32～33等を執筆した。

注記及び主な参考文献

- 1 赤坂雅裕・佐藤光友編著『やさしく学ぶ特別活動』ミネルヴァ書房（平成30年3月）等。
- 2 杉田洋編著『平成29年版小学校新学習指導要領ポイント総整理 特別活動』東洋館出版（平成29年6月）、杉田洋編著『小学校新学習指導要領の展開 特別活動編』明治図書（平成29年11月）、藤田晃之編著『中学校新学習指導要領の展開 特別活動編』同（同）等。
- 3 杉田洋著『自分を鍛え、集団を創る！特別活動の教育技術』小学館（平成25年3月、PP.78～79、95～99）。
- 4 佐藤洋一・左近妙子「資質・能力を育てる国語科カリキュラム・マネジメント——生きている尊さ、切実さを実感させる授業開発（小学校1年・6年）を例に——」『名古屋学芸大学研究紀要 教養・学際編第15号』（平成31年3月）。
- 5 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター発行指導資料・事例集「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）リーフレット版、『係活動をどう指導するの？』」（平成25年7月、P.9）。
- 6 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター発行指導資料・事例集「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）リーフレット版『学級生活を楽しく豊かにする係活動・集会活動』」（平成30年7月、P.11）。
- 7 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター発行指導資料・事例集「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）『係活動の指導のポイントは？』」（平成26年6月、P.59）。
- 8 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター発行「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」（平成30年7月、P.35）。
- 9 佐藤洋一「これからの教育に必要な資質・能力（体験的「教職入門」試論）——ユニークに、共感とやさしさ、したたかに——」『資質・能力を育てる教職カリキュラム研究（教育実践記録集）』名古屋学芸大学教職課程研究会編（平成31年3月）。
- 10 佐藤洋一「次世代の教育を創る教職カリキュラム研究（教育課程・教育方法論）——ステイブ・ジョブズのような変わったやつはいないのか——」『資質・能力を育てる教職カリキュラム研究（教育実践記録集）』名古屋学芸大学教職課程研究会編（平成31年3月）等。
- 11 『「教育」の経済学 No.144』東洋経済新報社（平成27年10月）等。